

平成 30 年度 国内調査事業 報告書

『ジビエを活用したエコツーリズムによる地域振興』

【調査地】

北海道紋別郡西興部村

【調査員】

移住・交流推進課 副参事 菱川 拓也（派遣元：岡山県）

移住・交流推進課 副参事 佐藤 秀樹（派遣元：青森県田子町）

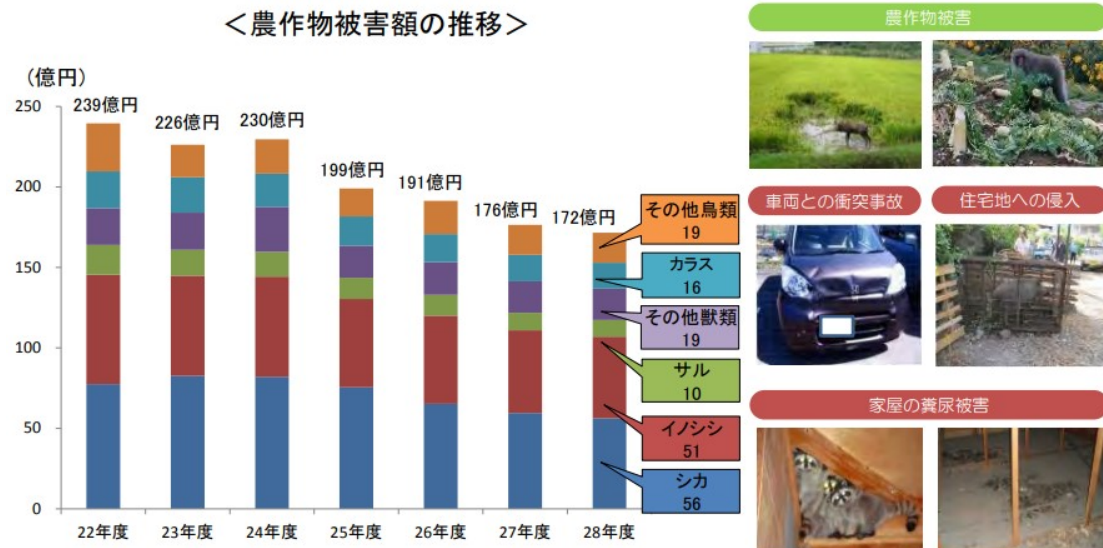
編集室 副参事 山影 奏絵（派遣元：高知県高知市）

1. はじめに

(1) 調査の背景

農林水産省が公表した「鳥獣被害の現状と対策」によると、調査直近の平成 28 年度における全国の農作物の被害総額は 172 億円となっており、近年は 200 億円前後で推移している（図 1 参照）。さらに、鳥獣被害による影響は、営農意欲の減退や耕作放棄・離農の増加、車両との衝突事故等ももたらしており、被害額として数字に表れる以上に農山漁村に深刻な影響を及ぼしている。このような鳥獣による農作物等の被害が深刻化している状況を踏まえ、鳥獣被害防止特措法による各自治体の被害防止計画の策定が進められており、様々な対策が打ち出されている。

図 1 平成 30 年 10 月 農林水産省 農村振興局作成「鳥獣被害の現状と対策」より



こうした中、従来廃棄されていた捕獲鳥獣を、「ジビエ」¹として有効活用することで地域の所得に変え、野生鳥獣をマイナスの存在からプラスの存在に変える取組が、注目されつつある。第 21 回農林水産業・地域の活力創造本部会議資料「ジビエ利用拡大に関する対応方針」²によれば、平成 31 年度に全国のジビエ利用量を倍増させることとして、ジビエ利用のモデル地区の選定と、それに伴う支援や、流通するジビエの安全性を確保するための「国産ジビエ認証制度」の確立、専用ポータルサイト等の全国ジビエプロモーションなど、多様なアプローチでジビエ利用拡大の更なる加速化が図られている。

¹ 「ジビエ」とは、フランス語で食材となる野生鳥獣肉のこと。

² 配布資料（参照 URL <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/nousui/dai21/gijisidai.html>）

また、こうした政府の方針を受けて、鳥獣被害が深刻化している自治体においては、ジビエ利用に係る取組が展開されている。しかし、全国の有害鳥獣捕獲総頭数に占めるシカ及びイノシシ³のジビエ利用率はいまだ 7%程度に留まることから、今後の利用拡大やその活用方法について、更なる検討を図る必要があるだろう。

以上のことから、ジビエを活用した地域振興に関する事例を調査する。

(2) 調査地選定の背景

①西興部村について

調査地に選定した西興部村は、北海道北東部、北海道オホーツク総合振興局管内の西北端に位置する面積 308.08 km²、人口 1,110 人（平成 30 年 11 月末現在）の村であり、鳥獣被害額は 21,170 千円（平成 29 年度 西興部村鳥獣被害防止計画）に上る。

②選定理由

NPO 法人西興部村猟区管理協会（以下「管理協会」という。）は、エゾシカの有効活用を進めるため、エゾシカの狩猟や解体の見学、現地の自然を堪能できる山菜取りや溪流釣りなどを盛り込んだ 2 泊 3 日のエゾシカエコツアーの開催といった特色ある取組を行っている。また、新人ハンターセミナーの実施など、次世代の野生動物管理の担い手育成にも取り組んでおり、ジビエ供給の担い手育成にも積極的である。これらの取組が評価され、平成 26 年度には総務省主催のふるさとづくり大賞の総務大臣賞を受賞しており、鳥獣対策における先進地として評価されている。

近年では「モノ」消費から「コト」消費、すなわち実際の価値を感じて消費する傾向の高まりが、国内消費のみならずインバウンド誘客の観点からも注目されている。当村は、単にジビエを売りにするだけでなく、そこで得られる体験を意識してエコツアーリズムの推進を図っていることから、ジビエの新たな活用方法の参考とすべく調査対象とした。

2. 調査内容

調査に際して、西興部村役場と管理協会の 2 か所でヒアリングを実施した。

(1) 西興部村役場

西興部村役場では、産業建設課の石川係長と地域おこし協力隊員の山中氏（管理協会へ派遣）から話を伺った。

エコツアーを含むジビエ振興に関連した村の取組としては、次に挙げる施設整備が中心であるとのことであった。

³ 農作物被害額におけるシカ及びイノシシの割合は半数以上を占める。

①西興部村鳥獣処理加工センター

(施設名「西興部ワイルドミート」)

捕獲した鳥獣を食肉として処理・加工することを目的に、過疎対策事業債を活用して約 9 千 3 百万円をかけて整備した。平成 26 年 3 月に竣工し、西興部村養鹿研究会へ指定管理委託している。

②西興部村鳥獣残滓等処理施設

鳥獣被害防止のために捕獲した鳥獣を処理・加工するにあたり、その際に生じた残滓（骨や内臓など）による土壌汚染や地下水汚染に対応するため、残滓の廃棄量を減らすことを目的に、国の鳥獣被害防止総合対策交付金を活用して約 1 千万円で整備した。平成 24 年 11 月に竣工し、村直営で管理を行っている。

③西興部村射撃場

鳥獣被害対策の担い手となるハンターの育成や技術向上を図ることを目的に、道庁の地域づくり総合交付金（地域づくり推進事業）を活用して、約 2 千 7 百万円をかけて整備した。平成 26 年 3 月竣工し、北海道猟友会興部支部西興部部会へ指定管理委託している。



地域おこし協力隊員の山中氏（左） 産業建設課の石川係長（右）



西興部村鳥獣処理加工センター（「西興部ワイルドミート」）

以上のように、管理協会の要望に応じてハード面での支援を行っているほか、地域おこし協力隊制度を活用して、村で採用した隊員を当協会へ派遣している。とりわけ村営射撃場の整備については、全国的にもあまり例のないことであり、村がハンターの担い手育成や技術向上、ひいては有害鳥獣対策に熱心に取り組んでいることの証左であるといえる。

設備整備のハード面は行政が担い、施設の管理・運営、ジビエエコツアー、ハンターの担い手育成といったソフト面は地域の団体が担う、相互連携体制が構築されている。

(2) NPO 法人西興部村猟区管理協会

管理協会では事務局長を務める伊^い吾^ご田^た氏に話を伺った。

①管理協会の概要

平成 16 年に発足した管理協会は、地元猟友会員等 32 名で構成されており、そのうち伊吾田事務局長と地域おこし協力隊員の山中氏の 2 名が常勤の職員として従事している。

管理協会を指導・監督する上部組織として、西興部村・地元農協・地元森林組合・村商工会・猟友会・学識経験者などから構成される「西興部村猟区管理運営委員会」が設置されている。

活動目的・内容

以下の項目の実現によって、次世代型の野生動物地域管理システムの構築を図る。

1) エゾシカ個体数管理による農林業等被害の抑制

2) ガイド付の狩猟による安全な狩猟の実現

ガイドの同伴を条件にすることで、乱獲や誤射、遭難などの防止を図る。

3) 村外ハンターの誘致による地域経済への寄与

入猟承認料やガイド料の徴収のほか、現地での宿泊増加により地域経済への波及効果が期待される。

4) 野生動物管理の担い手としての狩猟者の教育

酪農学園大学などと連携した講義及び実習による狩猟者の技術向上を図る。

管理協会の活動で着目すべきは、エゾシカを地域資源として捉え、村の活性化のために活用するという姿勢である。単に鳥獣を捕獲して農林業被害を抑制するだけではなく、捕獲した鳥獣も利活用するという考えは、今でこそ珍しくはないが、平成 16 年の設立時から一貫してそうした考えのもとで活動してきた管理協会は先駆的な存在といえる。

②猟区について

「猟区」とは「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」に基づいて都道府県知事の認可を受けて設定する狩猟を行う区域をいう。管理協会は、平成 16 年 7 月に北海道から西興部村全域での猟区開設の認可を受け、入猟者数・入猟日・捕獲対象鳥獣の種類・捕獲数などについて独自の管理を行っている。

猟区設定により、野生動物の保護管理とハンターの安全確保を実現するとともに、入猟承認料やガイド料を徴収することで、村の経済に貢献している。

③エコツアーについて

管理協会では、募集型エコツアーを定期的に行っている（平成 29 年度は 4 回開催）ほ

か、プログラムや日程、金額に応じたオーダーメイドツアーも実施している。エコツアーには、東京や大阪などの道外大都市圏からの参加者も多く、リピーターもおり、関係人口の創出に寄与している。

今回、我々調査グループも 1 泊 2 日でエコツアーの視察を行った。エコツアーの内容は別表のとおりである。

別表 視察時のエコツアー スケジュール

1 日目		
時間	内容	備考
5 : 30	ハンティング見学（1 時間程度）	
9 : 30	西興部村鳥獣処理加工センターにて、解体見学・体験	あわせて、エゾシカ皮なめし工房を見学
11 : 00	管理協会事務所で座学 （鳥獣被害対策を巡る村や管理協会等の動きの変遷について話を伺う）	
13 : 00	鹿牧場 ⁴ 見学	
14 : 00	溪流釣り・キノコ採り	地産品落葉キノコの採集
18 : 00	ジビエディナー	ゲストハウスで食事・宿泊
2 日目		
時間	内容	備考
9 : 00	シカの革を使ったキーホルダーづくり体験	管理協会事務所にて作業



解体作業の様子（伊吾田事務局長）



皮なめしの様子（地域おこし協力隊員の山中氏）

ハンティングや解体作業を見学するとともに、溪流釣りやキノコ狩りといったアクティビティを盛り込むことで、村の魅力を様々な角度から体感できる内容となっている。

解体作業にあたっては、ジビエとしての価値を損なわないよう正確に、かつ迅速に処理するとともに、見学者に不快感を与えないよう留意しているとのことだった。

⁴ 観光を目的として、西興部村養鹿研究会が運営している牧場。

また、村内の廃校を活用したゲストハウスと提携して、食事や宿泊の場を提供してもらうことによって、村内経済の活性化に寄与するのみならず、参加者と村民の交流も活発に行われている。

日本エコツーリズム協会によれば、「エコツーリズム」とは以下のように定義されている。

- ①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること
- ②観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう、適切な管理に基づく保護・保全を図ること
- ③地域資源の健全な保全・存続により地域経済への波及効果が実現することをねらいとする「資源の保護＋観光業の成立＋地域振興の融合」をめざす観光の考え方であり、それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とすること

この定義に照らし合わせると、エゾシカや溪流、森林といった地域固有の自然環境を生かした観光が成立しており、そうした資源の保全が図られており、さらには地域資源の存続によって地域経済への貢献も見られることから、本事例はエコツアーの模範といえる。

④その他の取組

管理協会では、捕獲したシカの皮を有効活用し、村の特産品として販売する「西興部ディアレザープロジェクト」を推進している。今回のエコツアーで体験したキーホルダーづくりもその一環で、キーホルダーのほかにもヘアゴムやカードケースなどを販売している。

その他の特徴的な取組として、狩猟の担い手育成のためのハンティングスクールを開催している。これは狩猟初心者等を対象に、村や酪農学園大学などと連携して、室内講義や実技実習を行うものである。



シカの革で作成したキーホルダー

また、ジビエの普及を目的とした「西興部鹿肉祭り」の開催や、村内外の小学生から大学生を対象とした環境教育事業を実施している。

3. おわりに

これまでエゾシカは有害鳥獣としての認識が地域に定着していたが、西興部村の取組によりイメージが大きく変わり、地域の資源として捉えられるようになった。既述のとおり、エゾシカはジビエ肉、革製品、角製品等にも無駄なく利用され、また、酪農学園大学との連携事業等でエゾシカの生態調査等を行うフィールドを提供するなどの面でも活用されている。さらには、管理協会による狩猟の担い手育成などの先駆的な取組が展開され、村内に

留まらず、村外、道外でも、狩猟をはじめとしたエゾシカやジビエに対する理解と関心を高めることに貢献している。

ジビエを活用したエコツーリズムの取組にあたって、管理協会と村が、各々の役割を明確化し着実に実践することで、円滑な推進を図っていることが分かった。

エコツーリズムを進めていく上で大切なことは、住民一人一人ができること、すべきこと、得意なことを行政がサポート、応援しながら、各々の役割を明確化し、地域全体で連携して実行することである。官民が連携して事業にあたることで、地域の人々の理解や関心へとつながり、西興部村の有害鳥獣被害の減少、地産地消・外部からのエコツアー参加等による地域経済の活性化、さらには関係人口の創出に寄与していると言える。調査した「ジビエを活用したエコツーリズム」は、村にある魅力を最大限に活かすことのできる取組であり、有害鳥獣駆除対策に併せて、環境教育など実践的に取り組むことのできる優良事例であった。

最後に、本調査にあたり、業務多忙の中ご協力いただいた西興部村役場、管理協会等の関係者の方々に厚く御礼を申し上げる。